

小樽商科大学 地域広報誌

# Hermes Courier

2005.3

第10号

ヘルメス・クーリエ



小林多喜二  
[1903 1933]  
(本学大正13年卒業アルバムより)



「蟹工船」の自筆原稿と  
その初版本



小林多喜二 著「工場細胞」の舞台となった北海製罐

## CONTENTS

### 特集：小林 多喜二

伊藤整生誕100年

「よみがえる伊藤整」への誘い

北洋銀行企業再生寄附研究部門設置

INFORMATION



伊藤 整 [1905 1969]  
(本学大正14年卒業アルバムより)



図書館（大正13年卒業アルバムより）



色内通り 右の建物が多喜二が就職した旧北海道拓殖銀行  
（大正13年卒業アルバムより）

## 特集 小林多喜二 takiji kobayashi

# 多喜二と小樽

小林多喜二（1903 - 33）は、小樽高等商業学校つまり小樽商科大学の前身校に、大正10年（1921年）に入学し、大正13年（1924年）に卒業した。ちょうど3カ年在学した。これについては、拙書『小林多喜二伝』（論創社、2003年）で詳述したので、それを読んでいただくことにし、そこに書かれなかったことを少し入れながら、再論する。

小林多喜二は、高商のすぐ下にあった庁立小樽商業学校から、競争試験でただ1人、小樽高商に合格した。1人しか入れなかったのは、同商業学校でストライキがされたからであった。彼は商業出なので、科目としては英語と数学が少し多く、簿記など商業科目の少ない、Dクラスに入った。

小林多喜二は、高商に入って本格的に文学をやりだした。商業学校時代の友人たちと文学サークルを作り、絵を描いた。絵は高商時代も続けた。

学校の月謝は伯父が出した。しかしその代わりに、パン屋と工場を営んでいた伯父の家で住み込みで働くことになった。ただし高商一年の途中には、実家へ戻った。

大正10年の秋に、彼が1年生の時、初代校長渡辺龍聖が退任して小樽を去り、教頭格の伴房次郎が第2代校長になった。大正デモクラシーの時代が及んできた。

彼が二年生になると、同じ庁立商業学校からの、かつての親友・同級生たちが沢山入学してきた。片岡亮一などである。また伊藤整も小樽中学から入学してきた。

多喜二は、『校友会誌』の編集委員をし、近代劇研究会を組織した。そこには、乗富道夫や福田勇一郎がいた。学生寮の福田の部屋で、その会は行なわれた。

乗富道夫は当時、先鋭的であった。そして多喜二に影響を与えた。乗富は、同級生では多喜二と一番親しかったと考えられる。乗富は、明治35年9月11日の生まれで、原籍は福岡県である。士族であり、大泊（コルサコフ）にあった樺太中学校を大正9年に卒業した。普通、豊原中学であるとされたが、間違いであった。それは本学所蔵

の学籍簿で確認できる。その1年後、大正10年に試験検定で小樽高商に入学し、多喜二と同学年になったのだった。そして大正13年に多喜二とともに卒業した。福田は後に朝日新聞の社長になった人である。

多喜二は思想的には、乗富と並んで、下級生の斉藤磯吉、寺田行雄から影響を受けた。

多喜二は二年生から第2外国語としてフランス語を選んだ。だから彼は英語とフランス語はできる。三年生の時に恒例の外国語劇に出演して



多喜二が編集委員をした「校友会誌」（左）と、多喜二の書きこみが見つかった「改造」。  
（本学図書館所蔵）



校友会誌編集委員（大正13年卒業アルバムより）

# 高商

倉田 稔（本学教授）



乗富 道夫  
（大正13年卒業）



福田 勇一郎  
（大正13年卒業）



寺田 行雄  
（大正15年卒業）

いる。教師の中では大熊信行と親しかった。高商には外国人教師が多かった。作家では志賀直哉に傾倒した。そして多くの小説を全国的雑誌に投稿している。多喜二は、高商図書館の雑誌『改造』『中央公論』などに載った文学作品に、いくつか書きこみをしている。その調査報告書は本学図書館にある。また、大杉栄の本の中の、クロボトキン作品の削除部分を訳して書き込んでいる（本学図書館所蔵）。

多喜二の卒業論文は、アルフレッド・ストロクの劇とクロボトキンの翻訳であった。この実物が現在商大にないのがミステリーとなっている。コピーしかないのである。また乗富道夫の卒業論文も実物がなく、それはマルクス『共産党宣言』の英語版の翻訳であった。それが教授会で大問題になったようだ。これを出して乗富は卒業したことになるのだが。

多喜二は卒業して北海道拓殖銀行に勤める。その卒業直後、有名な小樽高商軍事教練事件が起きるのであった。

（注）小樽高商軍事教練事件

小樽高商の軍事教練の教官（軍人）が、教練用に不適当な想定文を書いたので、一部学生がヒューマンイズムの立場から反対し、全国的に有名になった。

## 多喜二の業績（作品）一覧

小林多喜二の作品は、『小林多喜二全集』全7巻（新日本出版社、1980～83年）にほとんど収められている。それを見ていただきたい。（1）として、彼のいくつかの主要作品を抜き出しておく。

しかし、『全集』の中には収録されなかったものもあるので、それらを（2）として加えておく。

### （1）小林多喜二主要作品一覧

「作品テ・マ」完成時期、西暦年・月、（『発表誌』年・月）で、早い順で示す。

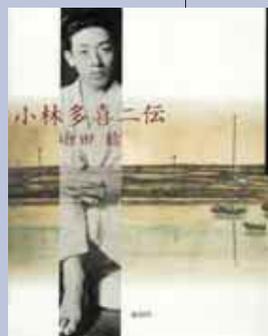
\*印は、全集に入っていないもの、未印刷つまり未発見である。

{ }は説明。

- 「今は昔」（『尊商』1917・12）
- 「祖母の遺言」（『小説倶楽部』1921・8）\*
- 「ある嫉妬」（『小説倶楽部』1921・12）\*
- 「龍介と乞食」（『小説倶楽部』1922・3）
- 「健」（『新興文学』1922・1）
- 「防雪林」1928・4（『社会評論』1947・11～12）
- 「一九二八年三月一五日」1928・8（『戦旗』1928・11～12）
- 「東俱知安行」1928・9（『改造』1930・12）
- 「蟹工船」1929・3（『戦旗』1929・5～6）
- 「不在地主」1929・9（『中央公論』1929・12）
- 「工場細胞」1930・2（『改造』1930・4～6）
- 「オルグ」1931・4（『改造』1931・5）
- 「安子」{初めは、「新女性気質」という題だった}1931・10（『都新聞』1931・8～10）
- 「沼尻村」1932・3（『改造』1931・4～5）
- 「救援ニュース NO. 18. 付録」1929・12（『戦旗』1930・2）
- 「転形期の人々」1932・8（『ナツプ』1931・10～11）
- 「党生活者」1932・8（『中央公論』1933・3～4）
- 「地区の人々」1933・1（『改造』1933・3）
- 「右翼的偏向の諸問題」1933・2（『プロレタリア文学』1932・2～3）

### （2）『小林多喜二全集』に収録されていない作品

- ・西丘はくあ宛て葉書 倉田稔編『小林多喜二短編小説集 蟹工船まで』論創社出版予定
- ・[清水賢一郎（多喜二のペンネーム）]「戦争から帰ってきた職工...八・一（反戦）デー近づく」『赤旗』1932年6月25日第80号と7月1日第81号に連載
- ・大熊信行宛て手紙2つ。 推定大正15年3月および昭和2年2月6日。『小林多喜二生誕100年没後70周年記念シンポジウム記録集』東銀座出版社2004年および『国文学』48の14
- ・震災時の葉書 大崎哲人「小林多喜二が小牧近江に当てた葉書」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 平成17年2月号・論評 倉田稔書『小林多喜二伝』648ページ



## 「小林多喜二伝」

A5版・913ページ  
発行所／論創社  
著者／倉田 稔

# 映画 と 『時代を撃て ・多喜二』

プロレタリア文学を代表する小林多喜二の生涯を描いた映画『時代を撃て・多喜二』が公開された。監督の池田博穂氏は、『東京大空襲』（平成5年）、『犬張子』（平成8年）、『憲法』（平成16年）で監督・脚本をつとめた人物であり、かつては、この映画で脚本を担当する橋祐典氏が監督した名作『ガラスのうさぎ』（昭和54年）で助監督をつとめている。映画は、多喜二を知る人の証言、研究者や文学者のインタビュー、資料、当時の映像、作品朗読からなるドキュメンタリーである。

現在、わが国では、資本主義の巨大な発達とマスメディアなどの操作を通じて、強力な支配システムが構築されている。有事立法、自衛隊のイラク派兵、憲法改正という一連の動きは、多喜二が生きたころの閉塞の時代を思わせるであろう。没後70年を過ぎ、多喜二への思いが全国的に高まるなか、この映画が製作された目的は、自由と平等を求めて闘った多喜二に向き合い、見失いがちな原点を再確認するとともに、社会正義を目指すことの素晴らしさを多くの若者たちと共有する点にあるという。

映画には、多喜二が幼年期から青年期をすごした小樽も登場する。日本がファシズムに突き進もうとしていた昭和初期、非合法であった日本共産党の組織と党員をあぶりだすため、特別高等警察は残忍な拷問を繰り返していた。1928年3月15日、全国で1,600名の党員と支持者が検挙されたとき、小樽では約500名が検挙され、そのなかには多喜二に科学的社会主義を実践的・理論的に指導した先輩たちも含まれていた。この「三・一五事件」を生々しく描いたのが、多喜二がみずから処女作と呼ぶ『一九二八・三・一五』である。

多喜二は、幼年期から青年期をすごした小樽で、すぐれた仲間とあたたかい家庭にめぐまれ、芸術を愛し、文豪の作品を読みふける文学青年だった。多喜二が入学した当時の小樽高商は、自由主義的な学風で、マルクスに造詣の深い教師が多く、友人たちは社会科学研究会を結成し勉強していた。映画では、多喜二が何かと相談し教示を受けた「経済原論」担当教官の大熊信行や、「民法概論」担当教官の夏堀悌二郎（小樽地方裁判所判事）との交流が描かれる。夏堀の授業中、多喜二が「今の民法や刑法では基本的人権を守る点で不備なのではないですか」と尋ねると、夏堀は次のように応えた



「時代を撃て・多喜二」のポスター

監督の池田博穂氏



「正直言って満足すべきものではないと思っている。たとえば自白が証拠の王様だという考えがある限り拷問はなくなる。拷問が自白を強制し、その自白が拷問を正当化するという図式は、私はなくすべきだと考えている。すると多喜二は、「先生はかなりリベラル派の判事さんですね」と言ったという。池田監督は、電話によるインタビューで、小樽高商が多喜二の人生に与えた影響について次のように語る「小樽高商時代の多喜二の青春は、友人たちとの交友関係を考えても、とても充実したものだったのでしょうか。1学年下の伊藤整は、図書館で本を手にとると、ほとんどの本に多喜二が読んだ痕跡がみとめられて愕然としたというが、わたしも小樽商科大学に出向き、図書館の蔵書にある多喜二の書き込みを見て、小樽高商が多喜二に対して大きな影響を与えたのだらうと感じました」。

多喜二の自由と平等を求める姿勢は、私生活における恋の場面にもみとめられる。生涯の恋人であった田口タキは、身を売られ非人間的な境遇にある酌婦であったが、多喜二は借金をしボーナスをはたいて彼女を救い出す。多喜二の育った小樽の環境は、自然に社会変革の理論と運動にむすびついていた。彼にとって、タキを幸せにすることと世の中の不平等をなくすことは密接に関係していたのである。

多喜二の両親と池田監督は同じ秋田県出身であるが、監督にはそのことに対する思いもあるという「革命家になりがちだが、多喜二はひょうきんで茶目っ気があります。この明るさは、秋田音頭やドンパン節に代表される県民性のあるわけなのではないかと思っています」。人間の尊厳を冒すものに対する怒りを小説に描き、特別高等警察と生死をかけて闘いながらも茶目っ気を失わなかった多喜二のみずみずしい青春は、映画を観る者を感動させずにおかない。

（羽村 貴史）

## 「よみがえる伊藤整」への誘い

市立小樽文学館館長 亀井 秀雄



市立小樽文学館では、小樽が生んだ昭和の代表的な文学者・伊藤整の生誕100年を記念し、小樽商科大学の全面的な後援を得て講演会とシンポジウムを開催する運びとなりました。

伊藤整は小樽高等商業学校に在学した頃から詩を書き始め、卒業して小樽市立中学校の英語教師をしている間に、『雪明りの路』を出版して、高村光太郎たちから新進の詩人として注目されました。のち、東京商科大学本科（現・一橋大学）に入学して上京し、この頃から散文に転じて、「新心理主義文学」を提唱し、『感情細胞の断面』『潜在意識の軌道』など、無意識の領域に照明を当てる実験的な小説を発表して、川端康成から高い評価を得ました。今回の講演会の講師、オハイオ州立大学のウィリアム・タイラー助教授が最近翻訳を完成した『幽鬼の街』は、小樽を舞台に、印象拡大法という方法で記憶の深層を探った幻想的な小説で、塩谷を舞台にした『幽鬼の村』と合わせて、伊藤整の文壇的な評価が定まった作品とされています。伊藤整にはその他、小樽を舞台とした作品に『青春』『鳴海仙吉』『若い詩人の肖像』などがあり、それらにちなんで、今回は講演会のテーマを「伊藤整文学の原／幻境」としました。

伊藤整は戦後、小説『鳴海仙吉』と評論集『小説の方法』の両面から日本の近代小説の変革を企てましたが、昭和25年、イギリスの小説家、D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を翻訳し、小山書店から出版したところ、東京地検により「刑法第一七五条に定める猥褻文書販売罪」のかどで起訴されてしまいました。いわゆるチャタレイ裁判の始まりです。

戦後の新憲法下における言論裁判として注目された、この裁判で、伊藤整は法廷においてよく闘っただけでなく、『伊藤整氏の生活と意見』という自己戯画的な笑いの方法によって世論を味方につけ、また『裁判』というドキュメントを書いて、起訴の不当性を明らかにし、記録文学の白眉として絶賛されました。その他、伊藤整は「本質移転論」という独自の虚構理論によって、裁判を通して得た「権力・組織・人間・マスメディア」に関する認識を『火の鳥』や『氾濫』などの小説に結晶し、その多彩な活動によって「伊藤整の時代」とも言うべきエポックを作りました。シンポジウムはそのチャタレイ裁判に焦点を合わせたもので、イギリス・フランス・ア

メリカなどにおけるチャタレイ問題にも視野を拓けている、オベリン大学のアン・シェリフ助教授が参加して下さることになりました。

以上のような講演会とシンポジウムは、そのテーマと講師の顔ぶれにより、ひとり伊藤整研究にとどまらず、現代文学研究の面でも画期的な成果をもたらさうものと確信しています。また、このシンポジウムをより盛りあるものとするために、予備講座も開くことにしています。

### よみがえる伊藤整

#### 伊藤整生誕100年記念講演会・シンポジウム

会場：小樽商科大学210番教室  
日時：2005年6月18日・19日

#### 〔プログラム〕

##### 記念講演会：伊藤整文学の原／幻境

2005年6月18日（土）午後1時より

曾根博義（日本大学） 伊藤整と小樽  
ウィリアム・タイラー（オハイオ州立大学）『幽鬼の街』を翻訳して  
（日本語）

伊藤 礼（元日本大学教授） 父・伊藤整  
司会 玉川薫（市立小樽文学館）

##### シンポジウム：伊藤整の戦後とチャタレイ裁判

2005年6月19日（日）午後1時より

横手一彦（長崎総合科学大学） 被占領下の表現領域  
結城洋一郎（小樽商科大学） チャタレイ裁判と憲法  
アン・シェリフ（オベリン大学）

世界の「チャタレイ」問題と日本の場合（日本語）  
関伊藤整氏

紅野謙介（日本大学） 司会 亀井秀雄（市立小樽文学館）

##### 講演とシンポジウムのための予備講座

於、市立小樽文学館

2005年5月28日（土）午後2時より

亀井秀雄 『チャタレイ夫人の恋人』を読む

（HP「亀井秀雄の発言」<http://homepage2.nifty.com/k-sekirei/>に掲載予定）

2005年6月11日（土）午後2時より

亀井秀雄 「チャタレイ裁判」とはどんな裁判だったのか

（HP「亀井秀雄の発言」<http://homepage2.nifty.com/k-sekirei/>に掲載予定）



# 北洋銀行企業再生寄附研究部門が 設置されました



北海道企業は「なぜ」「どのようにして」  
危機的な状況に陥るのか？  
企業を再生するためには、  
「何を」「どのように」すべきか？



北海道最大の銀行である北洋銀行からの寄附で「北洋銀行企業再生寄附研究部門」が、本年4月に本学ビジネス創造センターに新設されます。研究テーマは「北海道企業の倒産および企業再生に関するケース分析」。全国の国立大学の中でも、企業再生をメインテーマとする寄附講座・寄附研究部門の設置は初めての試みです。また、地域金融機関の寄附によって設けられる講座は数多くありますが、そのほとんどが学生向けの特別講義や、市民向けの公開セミナーなど。研究を軸とした部門の開設は極めて稀で、その点でもユニークな試みであるといえます。

研究体制は、客員教授として、北洋銀行から田浦一史調査部部長を迎え、本学からは旗本智之大学院商学研究科助教授が当たります。田浦氏は、同行入行以来、主として融資業務においてキャリアを積み、道内企業の再生を数多く手がけられた事業再生のスペシャリストです。また、旗本助教授は、大学院で「コーポレート・ファイナンス」「会計情報と経営分析」「ビジネスプラン」「ケーススタディ」等を担当しています。

バブル崩壊後、倒産や廃業が社会問題となり、事業の再生に対する関心が高まりをみせている今日、危機的な経営状況に陥った企業の実態を明らかにし、地域経済の実情を踏まえた企業再生のあり方を探求することは、次代の北海道経済を切り開くうえでとても重要です。

多くの企業再生に取り組み、その再建を実現してきた北洋銀行の豊富なデータ“経験知”と、本学に蓄積されている研究資源、学術的な視点による“理論知”を融合することで、倒産から企業再生へ至るプロセスを体系的に研究していきます。具体的には、企業倒産の現状分析、再建案の策定手法、企業再建の成功の秘訣などを取り上げ、新たな経営理論や道内企業に適した再生の枠組みなどを模索していきます。

この試みから得られる研究成果は、学生への講義、地域住民を対象としたセミナーの開催など、幅広い人々に還元する計画です。そして広くは長期低迷している北海道経済の活性化に貢献し、社会的な知的共有財産を創造することが期待されます。

## Research program

Phase 1

ケース作成

Step 1 北海道における企業倒産の現状分析

Step 2 危機的な経営状況に陥ったケースの収集

Phase 2

ケース分析

Step 3 作成されたケースに基づいた企業分析

Step 4 危機的な状況から再生に至るプロセスのフォロー

Phase 3

スキームの体系化

Step 5 企業再生のためのフレームワークづくり

Step 6 企業再生を成功に導くための要因探索

Phase 4

成果の公表

Step 7 研究成果の公開

Step 8 研究成果に基づいた教育プログラムの開発



(客員教授)  
**田浦 一史氏**

(たうら ひとし)  
1955年 北海道出身(49歳)

1977年 北海道大学教育学部卒  
1977年 株式会社北洋相互銀行  
(現 株式会社北洋銀行) 入行  
1997年 北洋銀行苫小牧北支店長  
2000年 同行融資第一部審査役  
2002年 同行融資第一部副部長  
2004年 同行調査部部長(現任)  
入行以来、主として融資業務においてキャリアを積み、道内企業の再生を数多く手がけられてきた事業再生のスペシャリスト。



併任教員(助教授)  
**簗本 智之氏**

(はたもと さとし)  
1963年 北海道出身(41歳)

1994年 一橋大学大学院商学研究科博士課程後期単位取得退学  
1997年 小樽商科大学商学部商学科助教授  
2004年 同大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻助教授(現任)  
専攻は会計学。アントレプレナーシップ専攻では、「コーポレート・ファイナンス」「会計情報と経営分析」「ビジネスプラン」「ケーススタディ」等を担当。

## 企業再生のフロンティアへ

田浦一史氏からのメッセージ

本年4月より正式にスタートする「企業再生寄附研究部門」は全国の大学の中でも先駆的取組になるとのことであり、参画できる私にとっても大変光栄なことです。

平成に入ってから日本経済を振り返ってみますと、バブル崩壊からデフレ経済へと未曾有の厳しい経済環境が続き、堅実経営と言われた企業でさえもその傷みに苦しみ、その他多くの企業が相当な期間にわたり事業価値を毀損し続けました。特に“3つの過剰”といわれた設備・債務・雇用が足枷となって、必要な資金調達に支障が生じたケースも多く見受けられました。このため正常な企業の運営や戦略的な成長分野への投資など、前向きな経営への舵取りが困難となった企業が多く出現し、経済大国・日本の国家的問題に発展しました。そうした状況下「金融再生」と「企業再生」が効果的な処方として経済再生の主要な役割を担う事になりました。

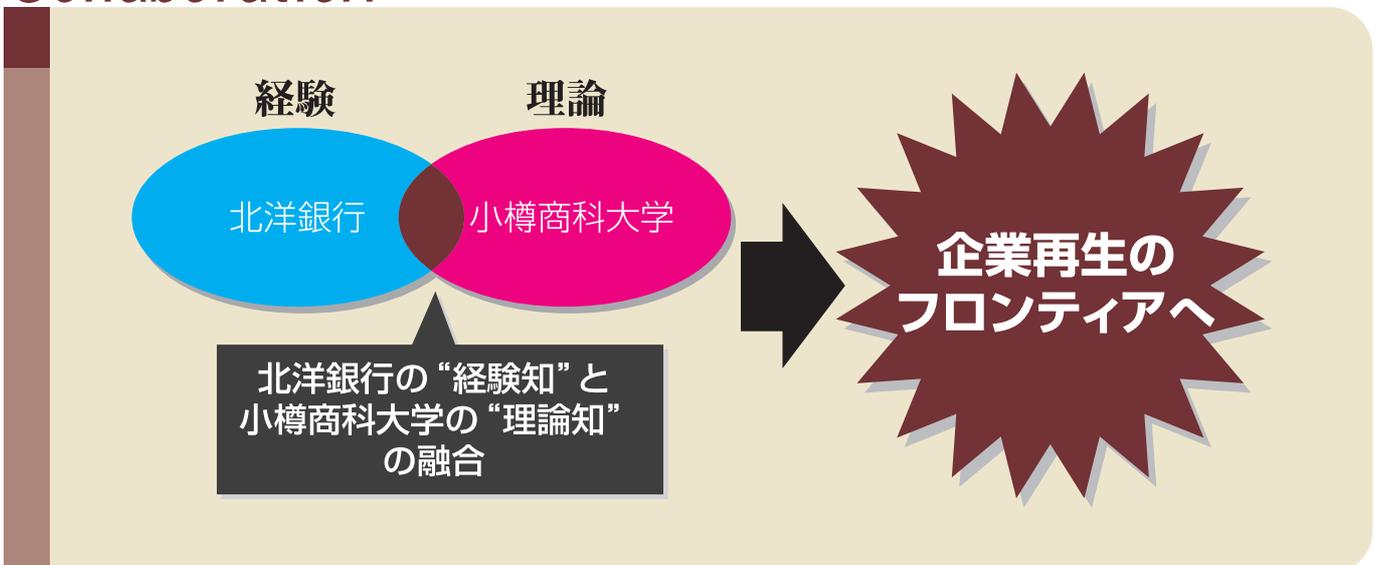
企業再生の考え方や手法はよく医療に例えられます。それは合理的で研ぎ澄まされた思考に基づいて手続きが進められる事、特に財務面では不採算部門の売却や債務免除など、いわば病巣の摘出や患部の切除を実行すること、また

当事者(特に経営者)は正に命懸け(社会的生命)の決断を迫られるからでしょう。加えて、“病は気から”といいますが、再生の現場ではステークホルダー(株主/債権者などの利害関係者)との厳しい交渉が避けられず、これに萎縮してしまうと、経営者の事業意欲が失われ、再生は覚束なくなります。メンタルな要素が大きく影響する点も医療と似ています。

小樽商科大学は全国で唯一の商科系の国立大学ですが、企業再生に関する研究部門を創設すると、起業から成長企業、そして不振企業から破綻、更にリカバリー(再生)までの“企業の一生”を研究分野として網羅できるという事になるのでしょうか。これを再生流に表現しますと「事業価値が増大する」となるでしょう。

企業再生は法務・会計・税務など横断的でしかも最新の知識が求められます。従って、何を調べればよいか、どう調べればよいか、どう使うのか、誰に聞けばよいか、を知る事が重要です。再生の現場で経験したこと、学んだこと、そして更に新しいノウハウを会得して研究に反映させたいと考えています。

## Collaboration



# INFORMATION

## 就職活動支援サークル「キャリアデザインプロジェクト」が活動開始

本学では、学生自治会の下で編集委員会を設けて、就職活動体験を綴った「直伝」が毎年発行され、学生にとって人気の高い必読書になっています。

また、依然として厳しい就職状況の中、就職内定を得ている4年生が中心となり、後輩の就職活動支援を目的として、昨年12月に学生ボランティアサークル「キャリアデザインプロジェクト」が発足しました。既に、学生による就職相談、OB・OGを招聘しての講演会や就職活動体験報告会など、学生ならではの企画を立ち上げて活発に活動しています。この程、関係者が集い当プロジェクトが発足会を行われました。会では、秋山義昭学長からねぎらいと激励の挨拶があり、プ

ロジェクトの発足を祝いました。

今後、このプロジェクトでは、2月～3月の就職活動が本格化する時期にあわせて更に活動を活性化させることにしており、大学としてもこれらの活動が、学生の切実な悩みや要求に同世代として共感を持って応えてくれる重要な役割を担うことを期待し、必要な後援・援助を行うこととしています。



秋山学長（前列正面中央右）、和田副学長（前列右から2人目）、岡崎事務局長（前列正面中央左）を囲むキャリアデザインプロジェクトのメンバー

## 第7回 ビジネスアイデアコンテストを開催

本学の学生サークルBICが主催し、全国の学生を対象とした新しいビジネス企画を発表する第7回ビジネスアイデアコンテスト（後援：ビジネス創造センター他）が、京王プラザホテル札幌にて開催されました。応募総数304通から選ばれた5本のアイデア発表がありました。発表者は審

査員と約40名の一般来場者を前に自分のアイデアを披露しました。このコンテストは年々規模が大きくなり（今回の応募総数は、第1回コンテストの1.8倍）本学の伝統である実学を生かした教育実践の企画として大きなイベントに成長しました。なお審査結果及び審査員は以下のとおりです。

- 最優秀賞 トイレ営業革命～トイレ広告における付加価値の提案～  
小樽商科大学商学部商学科4年 辰巳 哲也
- 優秀賞 手作り感の味わえる自然派志向のペットフードの製造と販売  
関西大学商学部商学科2年 坂本小津江・藤端 剛史
- 入選 わんこ幼稚園  
小樽商科大学商学部商学科1年 谷本 育美
- 入選 洗車付き駐車場  
小樽商科大学商学部企業法学科3年 蝦名 潤
- 入選 高齢者向け複合施設サン・ホームの経営  
北星学園大学アクティブフリーダム部 古谷 康裕

## 本学学生が人命救助で表彰

本学1年生の安孫子敏司君は、昨年12月29日にアルバイト先からの帰宅途中、民家から煙が出ているのを発見し、その現場付近の民家に消防署への通報を依頼するとともに、近くにいた男性2人と力を合わせ、92才の女性を助け出しました。

2月9日、秋山学長は安孫子君と懇談し、本人から改めてこの件の経緯について詳しく聞き、人命救助に対する賞賛の言葉と、今後も勉学とクラブ活動（テニス部）を両立させて有意義な学生生活を送るようにとの励ましの言葉を掛けました。

なお、安孫子君には、小樽市消防本部より2月4日付けで表彰状が贈られています。



人命救助をした安孫子君（写真右）と秋山学長

## 「小樽雪あかりの路」に参加

本学は、地域交流の一環として、小樽市の冬の最大イベント「小樽雪あかりの路」に参加しました。

「小樽雪あかりの路」は今年で第7回目となり、2月11日から20日までの10日間にわたって繰り広げられました。小樽運河をはじめ、市内のあちこちに雪や氷で作ったキャンドルにロウソクが灯され、街全体が幻想的なムードを醸し出すイベントであり、イベント名は同大が輩出した作家 伊藤整の詩集「雪明りの路」に由来しています。

今年は伊藤整の生誕100年にあたることもあり、同大若手職員を中心に有志が集い、2月14日から18日

までの5日間、キャンパス内で「商大雪あかりの路」を開催することを計画し、設営会場の除雪やスノー・キャンドルの作成、ロウソクの点灯等の作業に励みました。

最終日の18日は「湯気のおもてなし」として、来場者に甘酒、ココア、ホットワインが振る舞われました。また、当日は定期試験の最終日と重なり、試験を終えて安堵した学生や仕事を終えた教職員、一般市民らが、キャンドルの温かな灯りに魅せられ、写真を撮影したり、自らキャンドル作りを体験するなど、いつもとは違う幻想的なキャンパスの雰囲気には浸っていました。



## 第3回小樽商科大学一日教授会を開催

本学は、今年で第3回目の一日教授会を3月1日に市内中心街の道新ホールで開催しました。今回は、「言わせてもらおう、街から見た商大」と題して、特に市民と商大との交流、学生との交流をどのように広く深く行うことができるかを探りたいと考えて実施しました。当日は、学長が大学状況を説明した後に、本学の夜間主授業を受講している高校生、公開講座を受講している主婦の方、市内で企業経営をされている方、そして市民とのイベント交流を行っている本学学生にゲストスピーチを行って頂き、その後市民との意見交換を行いました。意見交換では、本学に対する厳しい意見を含め多くの有意義なご提言をいただきました。その内容については、本学のホームページと次号のヘルメス・クーリエで報告いたします。

## 平成17年度前期スケジュール（予定）

- 4月5日 前期授業開始
- 6日 入学式
- 19日～ 学生定期健康診断
- 20日 //
- 5月下旬 学生自治会定期大会
- 6月30日～ 大学祭
- 7月3日 //
- 7日 創立記念日
- 上旬 北海道地区大学体育大会
- 28日 前期定期試験
- 8月上旬 大学説明会（高校生対象）  
大学案内発行  
短期留学プログラム修了式
- 5日～ 夏季休業（9月30日迄）
- 15日 緑丘戦没者慰霊祭
- 9月下旬 短期留学プログラム入学式
- 30日 学位授与式（9月卒業）

「通常授業公開講座、外国語集中講座」は4月～7月に、また「高校生と社会人のためのオープンユニバーシティ」は6月～7月に開催する予定です。

## 編集後記

例年よりも積雪が多く、まだまだ寒さは続きますが、立派に成長した卒業生が巣立ち、ういいうい新しい新入生が入学してくる季節となりました。今号では、短い生涯を一杯に生きた多喜二を特集しています。また、本学の実学理論と北洋銀行の経験とを結びつけた新プロジェクトの発足についても紹介しております。今号の発行で、本誌ヘルメス・クーリエは第10号を数えることになりました。今後も、ますます良質な地域広報誌の発刊に努めてまいります。ご意見・ご批判をお寄せいただければ幸いです。（H.T）

## 編集スタッフ 中 善宏、田野有一、羽村貴史

### 【ご意見・ご要望のお願い】

広報委員会では、読者の皆様のご意見・ご要望をもとに、より良い広報誌を作成する所存です。取り上げたい話題、質問したいことなど何でも結構ですから下記にお寄せください。

E-mail : kouhou@office.otaru-uc.ac.jp FAX : 0134-27-5213

URL : http://www.otaru-uc.ac.jp